

晩春日記

牧野信一

青空文庫

(四月——日)

また、眼を醒すと夕方だ。とゞけてある弁当籠を開いてウヰスキーを二三杯飲むと、はつきり眼が醒る。鰯には手が出ない。セロリを噛む。

手紙を書くので明方までかゝつてしまった、春の晩、灯の下で手紙を書く——これは、いくつになつても余の胸を和やかにさせる、春になると君は手紙を寄す人だ……など、云はれたことがある。

(次の日)

眼を醒すと、また夕暮時だ。

机の上に鉛筆の走り書きで、妻の言伝が乗つてゐる。その一節「今Bさん達がお見えになつたので此処に案内して来たのですが、どうしてもあなたは起きません。」

Bの走り書の一節「フクロ！」

Bの妹さんの走り書き「諒闇中だから雪洞はともさないんですつて、夜、来たつて駄目よ、もうそろ／＼散りかゝるわ！」

B——「だが、この儘そつと歸つてやらう、夜来るかも知れない。」

Bの妹さん——「あたしは、さよならよ。」

妻——「あまり勉強すると毒よ。」

（その次の日）

Bに起される。

「銀座へ行かないか、これから——」

「東京の？」と余は訊ね返した、「いくら急行何とかあると云つたつて、厭に東京を近くしたがりアがるな。」

「ぢや、止さう。ぢや撞球屋へ行かないか。」

「何年にもキューをさはつたこともない。」

「俺のうちへ行かないか。」

「これから？」

「何時だらう？」

「俺は時計を持つてゐない。」

「俺も——」とBも云つた。

見て来るとBは云つて外へ出て行つた。小一時間もかゝつて漸く彼は戻つて来た。「おい、冗談ぢやない、もう一時過ぎだぜ、どこもかもみんな寝てゐる——停車場の近くまで行つてやつとこれを探して来た。」

Bは、ふところからアスペルの罐とカマボコを取り出した。

「おい、そこら辺に紙の皿があつたな、あれを出さないか。」

「弁当籠にいられて返してしまつた。」

……「何だか、あたりが直ぐに静かになつたやうだつたが、して見ると俺がやつて来た時刻も早いわけぢやなかつたんだな。」

「さうかも知れないね……眠くなつたか。」

「朝まで話して行くよ。」

「俺になるぞ、あしたから……」

「関はない、—— 験にかけてゐるものがあるんだが、それを此処へ持つて来ても好いか。」

「君さへ好かつたら……」

「学生時分とさつぱり変らないことになつてしまふね、試験勉強気分だね。」

余は、悲しさうに頬笑みながらBの前にあるウヰスキー・グラスを指差した。するとBも、頬笑んだかと思ふと、この時まで息も切らずに喋舌つてゐたのを、稍暫し眼を伏せたが、突然わけもない声を張りあげながら、盃を執り、余のそれにプロージツトして——そして余等は見事に盃を干した。

(次の夜)

妻が、今夜は久保田さんのラジオがあるからといふことを告げに来た。暫く振りで妻の方へ行つて晩飯を食べようといふことになつてBと出掛ける。

Bの妹さんも居た、余の母もゐた、Bと、余とそして余の妻と、みんなでラジオを聴く。Bは、久保田万太郎の好き読者である。声を聴くのは初めてだと云ふ。

「ほう！ 彼は、三十九かね、もう！」などとBは呟く。

「あたし、もう先からそれ位の齡の人かと思つてゐたわ。」とBの妹。

「馬鹿！ 手前えなんぞに何が解る……」Bは、熱心に聴いてゐ

た。

ラチオのお花見た。Bは、ボートの選手をやったことがある。

Bもヨロ／＼、余も怪しき脚どりで、眠くなりかけたらしい彼女等をそのバラツクに残して、二人で去る。提灯をさげる。肩を組んで田甫道を帰る。――「薄紫きのアーク灯！」「ガスとボンボリ鶴の群――」「石油エンジンコト／＼と」「タイワン館のシイナの子――だ。」「シヨンボリ立つた後ろから馬鹿バヤシ――か？」

一句一句が切れ／＼にしか口に出ない、闇雲にところどころ思ひ出す白秋の「ルナパーク」をBは、ひとりであらん限りの声で叫んだ。

「かうして俺は、ころがし廻る、この樽を、デイオゲネス聖者のやうに、この樽を、真面目かと思ふと冗談で、冗談かと思ふと生真面目で、あれからこれへ、これからあれへ、あてがあるやうで、あてがなく……」とBは歌つた。

「何の歌だ、それは？」

「デイオゲネス先生の樽のやうに——」

「もう直ぐだよ、あまり大声は止せよ。出たらめはもう止さうよ。」と余はBを支えた。

「憎しみからと思へば愛^{イトシミ}情で……さうかと思ふと憎しみで」

「おい、変な即興歌は御免だよ。」

「俺の歌ぢやないよ、それはヨハンの——」

「ヨハン？」

「さうだ。文句はちつたあ違つてゐるかも知れないが、これはヨハンの歌だ、ヨハンが作つた歌なんだ、ヨハン・オルフガング・ゲイテの……」

（次の日）

また夕暮時に――。

（その次の日）

また――。

あまり勉強すると毒ですよ――と、また妻が書いて行つた。鉛筆で、紙の皿の隅に。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第三卷」筑摩書房

2002（平成14）年5月20日初版第1刷

底本の親本：「随筆 第二巻第五号（五月号）」人文会出版部

1927（昭和2）年5月1日発行

初出：「随筆 第二巻第五号（五月号）」人文会出版部

1927（昭和2）年5月1日発行

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年7月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

晩春日記

牧野信一

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>